【327】

氏　名(本　籍)	三宅　智(みやけ さとる)(東　京)
学位の種類	博　士(医　学)
学位記番号	博甲第 1,414 号
学位授与年月日	平成10年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	医学研究科
学位論文題目	**地域での長期的な血圧管理の効果と問題点** －循環器検診の受診群と非受診群の比較検討－

主　査	筑波大学教授	医学博士	庄司進一
副　査	筑波大学教授	医学博士	能勢忠男
副　査	筑波大学教授	医学博士	加納克己
副　査	筑波大学教授	医学博士	小林廉毅
副　査	筑波大学助教授	医学博士	戸村成男

論文の内容の要旨

(目的)

脳卒中予防対策に先駆的に取り組んできた町における(1)循環器検診の受診群と非受診群の脳卒中発生状況,(2)血圧の状態,(3)その管理状態を比較検討し,課題を明らかにすることを目的とする。

(対象と方法)

高知県野市町で昭和44年から勤務者を除いた40歳以上の住民(3,039人)に対象として循環器検診が始まった(受診率92.0%)。脳卒中発症者調査は,医療機関,保健補導員,保健婦,検診,国保レセプト,死亡票,全世帯アンケート調査から調査した。昭和40年から昭和59年までを4年間ずつ5つの時期に分け,標準化死亡比を算出した。循環器検診を昭和57～59年の3年間受診していない40歳～69歳の者2,062人の中から40歳代,50歳代,60歳代の男女それぞれ60人ずつを無作為に抽出し,検診した(受診率86.7%)。先の3年間に循環器検診をした群と1度もしていない群の40～69歳の脳卒中発症率を昭和63年まで追跡した。40歳以上の全住民に対して住民健康調査を数年に一度行っている。昭和61年度の調査で,血圧測定状況を質問した(回収率93.9%)。

(結果)

(1)脳卒中発生状況および死亡状況の推移

昭和45年を基準人口として年齢補正した40歳以上の脳卒中発症率は,昭和44～47年に対し男性は昭和56～59年が,女性ではいずれの期間も有意に低下していた。標準化死亡比は昭和40～43年に1.0で全国平均であったが,昭和56～59年に男性0.84,女性0.56と有意に低値となった。

(2)検診受診者の血圧値の推移

昭和44～46年と昭和57～59年で比較すると,40～69歳で,最大血圧は40歳代男性を除き低下し,最小血圧は40歳代男女で上昇していた。

(3)検診受診の有無と脳卒中発症率

標準人口集団を設定し,年齢補正し,脳卒中発生率を比較すると,受診の有無で有意差があり,受診群で低かった。女性でも有意差があり,男性は低下傾向を示した。

(4)検診受診の有無と血圧値の比較

最大血圧は男性の50歳代と男女の60歳代，最小血圧は男性の50歳代と60歳代で，有意に検診受診群で低かった。

高血圧（最大血圧160mmHg以上または最小血圧90mmHg以上）の率は，男女共に50歳代と60歳代で検診受診群で有意に低かった。

（5）住民の血圧測定状況

農林業者と比較して，男性では販売，労務・技能者が，女性では販売，サービス，主婦が血圧測定を年1回もしていない率が有意に高かった。これらの職種は職場検診と住民検診（循環器検診）の両者を受ける機会が少なかった。事業所の従業員数に平行して職場検診で血圧測定を受ける割合が変化していた。

（6）検診受診の有無と自分の血圧についての意識と受療行動

自分の血圧がわからない者の割合は受診群で低く，自分が高血圧と意識している者の割合は受診群で高かった。

（考察）

循環器検診の受診，血圧の認識，生活習慣の改善や受療，血圧値低下，脳卒中発症率低下および脳卒中死亡率低下の関係が示唆された。検診非受診群は血圧値が高い，脳卒中発症率が高い，などが示された。問題点として，1）ハイリスクの者が非受診群にいる。2）60歳代の退職者と主婦に非受診が目立つ。退職と転入の情報を保健担当が得られるようにすべきである。3）検診の機会の少ない職種がある。特に中小零細企業の職域での健康管理に問題がある。4）専門・技術・管理・事務などの職種では自分の血圧の認識がない者の割合が高い。

審査の結果の要旨

高知県野市町での20年間にも渡る保健活動を通して，血圧コントロールが脳卒中発症率と死亡率の低下に繋がることを実証した。このような血圧コントロールから漏れる群の分析から，領域保健システムと地域保健システムのどちらにも属することなく，健康管理が不十分になっている職種がある。これら2つの実証は，循環器疾患・脳血管障害対策において，老人保健事業や労働安全衛生法による職域検診事業など国レベルの政策決定に大変重要な示唆を与えるものであり，質の高い評価ある論文である。

よって，著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。